

の影響は今のところなく、「車についていた」との情報もあり、どこかで発生したものが、車で運ばれたことも考えられる、とのことだった。

いずれにしても人為的な持ち込みが考えられるが、3～4月にクズの蔓の部分に本種が作る虫こぶ・ゴールを見つけることが、本種発見の近道になる。宍粟市はじめ各地のクズなどに注意していただきたい。

○参考文献

- 秋田勝己・乙部宏・高桑正敏, 2010. 三重県に定着した外来種フェモラータオオモボトハムシの駆除を試みて. 月刊むし, 473: 43-44
- 秋田勝己・乙部宏・鈴木知之・中西元男・高桑正敏, 2011. 三重県に定着したフェモラータオオモボトハムシ. 月刊むし, 485: 36-43
- 戎谷秀雄・宮武頼夫, 2011. 三重県におけるフェモラータオオモボトハムシの2006年の記録. 月刊むし, 488: 41

(Susumu MIKI 兵庫県明石市)

姫路市京見山でケカゲロウを採集

脇村 涼太郎

筆者は2016年6月25日に姫路市広畑区京見山において、ケカゲロウ *Isoscelipteron okamotoi* を1個体採集しているので報告する(写真).



ケカゲロウはケカゲロウ科 Berothidae の中で唯一の日本産種で比較的稀な種とされる。幼虫はシロアリを食べ成長し(小松, 2014)成虫は光に集まることが知られている。しかし、記録は少なく、採集例も多くない。

今回採集したのは姫路市広畑区京見山の南側標高100m付近である。この山はシカによる食害と乾燥が

激しく虫にとってあまりいい環境ではない。天候は雨時々曇りで何かいないかとビーティングしながら山を登っていると本種が1頭落ちた。その後もこの山に採集に行っているが未だ追加個体は得られていない。

○参考文献

- 小松貴, 2014. 裏山の奇人: 野にたゆたう博物学. 東海大学出版会.
- 丸山宗利・小松貴・工藤誠也・島田拓・木野村恭一, 2013. アリの巣の生きもの図鑑. 東海大学出版会.
- (Ryōtarō WAKIMURA 姫路市立広畑中学校2年)

兵庫県佐用郡でイトヒキミジンアリタケを採集

脇村 涼太郎

筆者は2016年4月3日に佐用郡佐用町船越においてイトヒキミジンアリタケ *Cordyceps* sp. を採集したので報告する(写真).



イトヒキミジンアリタケは冬虫夏草の一種で基本的にオオアリの仲間を宿主とする。個体数は場所によっては多い。ただ、色彩が地味なため発見は困難を極める。似た種に台湾アリタケがいてイトヒキミジンアリタケと酷似している。台湾アリタケは湿った場所にいるのに対しイトヒキミジンアリタケは比較的乾燥した場所に生息している。

今回採集したのは佐用町船越の瑠璃寺へと続く林道の脇に生えている杉の樹皮下である。この日は佐用昆虫館で毎年恒例の虫開きが行われていた。その後、樹皮めくりで何か採集できないものかと杉の皮を剥ぎまわっていたところ本個体を発見した。その後も樹皮めくりを続けたが、追加個体は得られなかった。

家に帰って調べてみたところ、アリタケの一種であることは分かったがそれ以上のことは分からなかった。しかし、神戸大学で毎年行われているムシのお話五つ星

レストランに冬虫夏草の専門家の盛口満氏が講演に来ることを知り、直接聞いたところイトヒキミジンアリタケだということだった。台湾アリタケとの見分け方は宿主がオオアリの仲間かトゲアリの仲間かということであるらしく、オオアリがイトヒキミジンアリタケ、トゲアリが台湾アリタケということらしく台湾アリタケはストローマが短いのが特徴だと教えていただいた。

末筆ながら発表を進めていただいた三木進氏、久保弘幸氏、人と自然の博物館の八木剛氏、同定とアドバイスをしていただいた沖縄大学人文学部准教授の盛口満氏に厚く御礼申し上げます。

○参考文献

- 盛口満, 2009. 冬虫夏草ハンドブック. 文一総合出版.
久保弘幸, 2015. 冬虫夏草を多数確認. きべりはむし, 37 (2): 71.

(Ryōtarō WAKIMURA 姫路市立広畑中学校 2年)

アブラナ科植物を専食するハムシ類の農地における捕食者

松原 慧

ダイコンハムシ *Phaedon brassicae* Baly (図 1.a, b) やキスジノミハムシ *Phyllotreta striolata* Fabricius (図 1.c) は、ハクサイやキャベツなどのアブラナ科作物上で頻繁に見られる。これまで、害虫として知られるハムシ類の主な天敵として、ヤドリバエ類や捕食性のカメムシ類、ヒメコバチ類、ポプリダニ類などの節足動物が報告されているが (Logan *et al.*, 1987), 上記のアブラナ科植物を専食するハムシ類の天敵は知られていない。著者はアブラナ科作物上においてカエル類とクモ類にハムシ類が捕食されていたのを確認したので報告する。

観察は、兵庫県丹波市山南町の畑で行った。この畑では除草剤や殺虫剤を使用しておらず、多くの植食性昆虫を確認できる。2016年7月18日にニホンアマガエル *Hyla japonica* Günther (図 1.d) が排泄した糞を採集したところ、キスジノミハムシの鞘翅が含まれていたことを確認した (図 2.a)。また、同年9月12日にハクサイ上で採集したカエル類の糞からダイコンハムシの鞘翅が確認された (図 2.b)。この糞は、サイズと採集した時期からニホンアマガエルのものと推定した。また、同年9月25日の午後8時頃に、キャベツ上にてトノサマガエル *Pelophylax nigromaculatus* Hallowell (図 1.e) がダイコンハムシの3齢幼虫 (図 1.b) を捕食したのを目撃した。さらに、同年10月6日の午前11時頃に、ダイコン上でハナグモ *Ebrechtella tricuspidata* Fabricius が

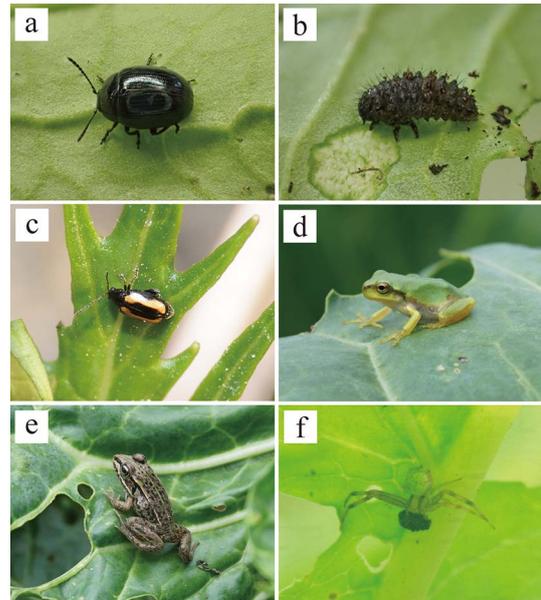


図1. 調査地で見られたハムシ類およびそれらの天敵. a. ハクサイ上のダイコンハムシの成虫. b. ハクサイ上のダイコンハムシの3齢幼虫. c. ミズナ上のキスジノミハムシの成虫. d. キャベツ上のニホンアマガエル. e. キャベツ上のトノサマガエル. f. ダイコン上でダイコンハムシの3齢幼虫を捕食するハナグモ.

ダイコンハムシの3齢幼虫を捕食しているのを目撃した (図 1.f)。

著者の観察により、カエル類やクモ類が作物上でハムシ類を捕食することが明らかになった。今回採集したカエル類の糞には、複数個体のハムシ類が含まれており (図 2), カエル類はハムシ類を頻繁に餌として利用している可能性が高い。平井 (2007) は、大豆畑で採集されたニホンアマガエルの胃内容物にウリハムシモドキ *Atrachya menetriesi* Faldermann とフタスジヒメハムシ *Medythia nigrobilineata* Motschulsky が含まれていたことを確認している。これらのことから、これまでハムシ類の天敵として寄生性の節足動物が多く確認されていたが、カエル類のような広食性の脊椎動物も重要な天敵であると考えられる。また、アブラナ科作物を食害するカブラハバチ *Athalia rosae* Linnaeus の幼虫はニホンアマガエルに作物上で攻撃されたことが報告されており (Matsubara & Sugiura, 2017), 農業生態系においてカエル類やクモ類は害虫の個体群動態に影響を及ぼさる捕食者であると考えられている (平井, 2007; Nyffeler *et al.*, 1992)。生物的防除の観点から、生物農薬として天敵を導入するとともに土着の捕食者を補助的に用いることがより効率的な防除に繋がると考えられている (桐谷, 1990; 矢野, 2003)。継続的に農地の生物群集の観察を行うことで、農業生態系の理解が深まり、新たな防除法の開発に繋がるかもしれない。

杉浦真治氏 (神戸大学) には本稿を校閲していただいた。ここに厚くお礼申し上げます。